

令和 5 年 5 月 29 日現在

機関番号：34601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K02869

研究課題名(和文)国語教育学の発展における日本語学が果たした役割に関する研究 - 昭和前期を中心に -

研究課題名(英文) Research on the Role of Japanese Linguistics in the Development of Japanese Language Education - Focusing on the Early Showa Period -

研究代表者

吉田 雅昭 (Yoshida, Masaaki)

帝塚山大学・教育学部・准教授

研究者番号：40709309

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：昭和前期の日本語学者による国語教育論を考察した。まず、当時の代表的日本語学者である時枝誠記の著作を調べ、国語教育を、訓練を主とする技術教育と規定する姿勢は一貫しているが、文学鑑賞の否定や<たどり読み>理論など、次第に時枝が独自色を強めたことがわかった。次に、方言研究の立場から独自の主張を展開した藤原与一は、日常会話を生活語と捉え、生活語の向上を目指し、話し言葉を主軸にした国語教育論を構想した。そして、マルクス主義的理論から日本語を研究した奥田靖雄らは客観的な読みを重視し、主観的読みを否定した。日本語力育成という観点では共通するが、日本語の捉え方が異なるため、教育論にも差異が生じているのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、国語(科)教育がどのような性格を持ち、何を目標とする科目であるのかを歴史的な脈から考察する上で有意義な研究である。学問分野としての国語(科)教育学と日本語学はかなり乖離しているのが現状だが、本研究で取り上げた昭和前期(特に戦後期)は、当時の国語学者が国語教育へも積極的に関わり、それが国語(科)教育学の発展にも寄与していたことである。本研究で扱った時枝誠記は、能力主義といわれる言語能力育成を重視する一つの潮流を形成した。また、藤原与一の話し言葉重視の姿勢や奥田靖雄らの客観主義的教育論は、日本語能力の育成という共通項を有しつつ、その内実には様々な考えがあることを示しているのである。

研究成果の概要(英文)：This study examines theories of Japanese language education by Japanese language scholars in the early Showa period. First, we examined the works of Motoki Tokieda, and found that while his stance of defining Japanese language education as technical education focusing on training was consistent, Tokieda gradually developed his own unique style, including the rejection of literary appreciation and the tadoriyomi (trace reading) theory. Yoichi Fujiwara, who developed his own arguments from the standpoint of dialect research, envisioned a theory of Japanese language education centered on the spoken language, and aimed to improve the colloquial language. Yasuo Okuda et al. studied the Japanese language from a Marxist perspective, emphasizing objective readings and rejecting subjective readings. Although these scholars shared the same perspective of fostering Japanese language skills, their theories of education differ because of their different conceptions of the Japanese language.

研究分野：国語科教育学、日本語学

キーワード：国語科教育学 日本語学 時枝誠記 藤原与一 奥田靖雄 鈴木重幸 言語過程説 生活語

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景には、日本における母語話者を対象とした日本語の授業である国語科について研究する国語教育学において、日本語を言語学的に研究する分野である日本語学の知見がどのような役割を果たしてきたのか、という問題意識が存在する。学習指導要領など国の方針に従い授業内容や項目が定められる科目として、国語科には日本語にまつわる多くの内容が含まれていて、国語教育学にも多様な観点や意見が存在する。一方、日本語学(国語学)は日本語を科学的に調べることが目的であり、考察対象が日本語そのものから外れることはない。このように目的が異なる両分野だが、戦前から戦後にかけては日本語学者(当時の国語学者)が積極的に国語教育と関わり、独自の教育論を展開するなど、現代に比べ深いつながりを有していたと考えられる。そのため、戦後など昭和前期を対象に考察することで、日本語研究の知見が国語科教育にどのように生かされるのかを、あらためて見直すことができると考え、本研究に取り組む。

2. 研究の目的

(1) 研究目的は、国語教育学の発展期である昭和前期(特に戦後期)において、当時の日本語研究者がどのような国語教育論を展開していたのかを明らかにすることである。

(2) 戦後期の国語教育学は、戦前から国語教育分野で活躍していた代表的な国語教育学者の西尾実などによる、言語生活を重要視する考えが大きく存在しており、戦後期でも西尾は国語教育学の中心的存在であった。それに対し、戦前に『国語学原論』を出版し、言語過程説を樹立した国語学者の時枝誠記(戦時中に東京帝国大学教授となり、戦後は東京大学文学部国語研究室教授として国語学界に大きな影響を与えた国語学者)は、戦後になってから自身の言語理論を背景に、国語教育にも積極的に関わるようになった。その中で、西尾に対する反論があり、国語教育学上有名な、西尾・時枝論争を起し、国語教育学の世界においても時枝は一定の存在感を持ち続けた。この時枝の国語教育論の考察が主要目的である。

(3) 一方、戦前から方言学に従事し、各地の方言調査に取り組みつつ広島文理科大学(戦後は広島大学)の教官として独自の国語教育論を展開したのが方言学者の藤原与一であった。藤原は時枝と同時代の研究者だが、時枝とは異なり地方の視点からどのような国語の教育が必要なのかを問い続けた。この藤原の理論の考察も本研究の主要目的である。

(4) その他、戦後に教育科学研究会・国語部会の一員として時枝に反対する理論を展開した日本語研究者である奥田靖雄・鈴木重幸の国語教育論に関する考察も行っている。

3. 研究の方法

(1) 方法としては、上記で名前を挙げた時枝、藤原、奥田、鈴木の国語教育に関する著書や論文を対象とした考察を行った。考察の際、彼らの日本語研究の知見が、自身の国語教育論にどのように反映されているかという点を意識して考察を行った。

(2) 時枝の場合は言語過程説という自分の理論が国語教育を必要とすると考えていた。その理由として、時枝は言語を実体のない機能的な存在と捉え、互いに言語の意味・用法を共有している事実を自明のものとは見なしていなかった。言語が通じるにはそれ相応の学習が必要であり、母語話者であっても言語を身につける訓練が必要だと考えていた。そして、国語科にあっても言語学習の訓練を重要視した。時枝の国語教育論は言語過程説を抜きには存在せず、本研究でも言語過程説を基にしながら時枝が自身の理論をどう発展させたのかを考えた。

(3) 藤原は、方言研究の知見がそのまま自身の国語教育論に反映されている。本研究でも、藤原の方言や日本語に関する捉え方に沿うように考察を行った。藤原は地域に方言話者が丁寧な話し方を行う中で、方言の音声や文法体系に見合うような共通語を話すことが重要だと考えた。自然な形で共通語を話し、次第に標準語を獲得することを教育の場でも実現しようとしたのである。

(4) 奥田は、自身がロシア語に通じていたことから、戦後のソビエトの言語学に強い影響を受けた。奥田の国語教育論は彼の言語論と結びついたもので、唯物論的な客観主義を唱えている。奥田の考察においても、客観主義的考えが、特に文学教育の理論においてどのように反映されているのかを意識して考察した。また、奥田と長年行動を共にした鈴木だが、アカデミズムの世界では時枝を指導教官に仰いでいた。東京大学の系統に属する鈴木だが、自分の考えは東大系統の文法論への反対姿勢を示したもので、単語認定の観点から学校文法を厳しく批判した。このように、日本語(言語)に対する捉え方が、彼らの国語教育論とどう繋がるかを明らかにするのが、本研究を行う上での主な方法となった。

4. 研究成果

(1) 研究成果は、学会発表及び論文刊行を行い、成果の発表に努めた。本研究の初年度である2020年度は新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、社会が大きく混乱したこともあり、特に前半は研究を行えるような環境にはなかった。そのような中でも2020年10月に、資料発表の形

で、全国大学国語教育学会で発表を行うことができた。その後、2021、2022 年度も同学会のオンライン形式による発表を行うなど、国語科教育に携わる人たちにに向けた発表を継続的に実施した。論文に関しては、勤務大学発行の紀要でオープンテキストの形で公刊した。また、日本語学系の雑誌からも公刊し、日本語学的視点からの国語教育研究を形として示すことができた。

(2) 時枝誠記の国語教育に関する主著である『国語教育の方法』と『改稿 国語教育の方法』を調べたところ、国語教育を、訓練を主とする技術教育だと規定し、その考え自体は変化していない。しかし、改稿版においては文学における鑑賞を否定するというかなり大胆な議論を展開したり「たどり読み」的な読解教育を唱えたりと、改稿版はより時枝の独自色を際立たせる内容になっていることがわかった。そして、時枝は言語技術に特化した教育理論を打ち出した結果、特に改稿版では時枝国語教育論の到達点と限界を明確に示していると捉えられるのである。また、時枝と国語教育学者の古田拓の論争からは、原理的主張を繰り返す時枝と実践の立場から時枝を批判する古田（多くの国語学者を代表する意見）の意見の相違の大きさが明確となった。そこから、時枝理論が初歩的範囲にとどまり国語教育全体を包括していないことも見えてきた。

(3) 藤原与一について、1930,40 年代の（初期の）国語教育に関する考えを調べた。そこで、藤原の初期国語教育論には、次のような特徴があることが明らかとなった。

日常使用する言葉（方言）を生活語と捉え、生活語の向上を国語教育の主な目標とする。

自分自身の国語の実態を自覚し、把握することが必要である。

話し言葉を根底とした国語問題に対する国語政策が、国語教育の根底に位置づけられる。

地方の実態に即した教育を行い、地方語を母胎とした標準語の実現を目指す。

表現力の向上と共に、人間性の向上も目指す。

こうして、戦時中や戦後の混乱期にあって、地方に視点を置き一般の人々の国語能力向上を目指し、独自の国語教育論を展開したことがわかった。また、方言研究と国語教育を両立させようとした。究極的には方言からの脱却を目指しながら、可能な限り、方言生活を否定しないような国語教育の実現を志向したと考えられるのである。

(4) 教育科学研究会・国語部会を代表する日本語学者である奥田靖雄と鈴木重幸に関し、奥田は文学教育論争について、鈴木は文法教育理論について、それぞれ考察した。奥田はマルクス主義的立場から、文章を客観的に読むことの重要性を説き、国語教育においても客観的な読解を目指した。そのため、文学を主観的に読むことを主張した人たちを「主観主義」とし、激しく攻撃した。奥田が批判した人には時枝も含まれる。このことから、奥田は文学教育論争を引き置きしている。また、鈴木は古文解釈のための文法論や動詞の活用などを中核とする学校文法理論（戦前に国語学者橋本進吉が提唱した考えに基づく学校文法）を、単語の一体性を無視した言語理論とし、激しく批判した。奥田同様、時枝の文法理論も鈴木は批判を行っている。こうして、奥田や鈴木は文部省による学校現場での国語科教育の在り方を批判し、自身が依拠するロシア・ソビエト経由の（マルクス主義的）客観主義により日本語を捉えることが国語教育の主要な目的であると考えた。彼らの理論は学校教育へのアンチテーゼとして一定の役割を果たしたといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 吉田雅昭	4. 巻 61
2. 論文標題 文学教育に関する奥田靖雄の主観主義批判について - 日本語学的立場からの国語教育論 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国語学研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田雅昭	4. 巻 2
2. 論文標題 時枝誠記と古田拓の論争について - 時枝国語教育論に対する実践的立場からの反応 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 帝塚山大学子育て支援センター紀要	6. 最初と最後の頁 53-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉田雅昭	4. 巻 60
2. 論文標題 時枝誠記の国語教育論の展開 - 『国語教育の方法』と『改稿 国語教育の方法』について -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国語学研究	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田雅昭	4. 巻 4
2. 論文標題 藤原与一の初期国語教育論について - 1930、40年代の言説 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 帝塚山大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 18-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉田雅昭	4. 巻 4
2. 論文標題 鈴木重幸の学校文法批判について - 戦後文法教育をどう捉えるか -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 帝塚山大学子育て支援センター紀要	6. 最初と最後の頁 36-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 吉田雅昭
2. 発表標題 文学教育に関する奥田靖雄の主観主義批判について - 日本語学的立場からの国語教育論 -
3. 学会等名 全国大学国語教育学会 第140回2021年度春期大会 (オンライン)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉田雅昭
2. 発表標題 藤原与一の初期国語教育論について - 1930,40 年代の言説 -
3. 学会等名 全国大学国語教育学会 第141回世田谷大会 (オンライン)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉田雅昭
2. 発表標題 時枝誠記と古田拓の論争について - 時枝国語教育論に対する実践的立場からの反応 -
3. 学会等名 第90回新潟県方言研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 吉田雅昭
2. 発表標題 時枝誠記の国語教育論について - 『国語教育の方法』から『改稿国語教育の方法』への展開 -
3. 学会等名 第139 回全国大学国語教育学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 吉田雅昭
2. 発表標題 国語教育と方言研究－藤原与一の理論的体系に関して－
3. 学会等名 全国大学国語教育学会 第142回 東京大会（オンライン）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉田雅昭
2. 発表標題 鈴木重幸の学校文法批判について - 戦後文法教育をどう捉えるか -
3. 学会等名 社会人文学会2022年度大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

「ひつじ書房」という出版社から、2023年刊行予定の書籍である『日本語変異論の現在』という論文集に、「国語教育と方言研究—藤原与一の理論的体系に関して—」という題名の論文を掲載する予定である。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------